



Title	疲れたボランティアの回復 : あるキリスト信仰者の事例から
Author(s)	佐々木, 美和
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 427-429
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60733
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

疲れたボランティアの回復 あるキリスト信仰者の事例から

佐々木 美和

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

どうして彼女は、戻ってくることができたのだろう。

8月初旬、熊本の災害支援ボランティアベースにてボランティアをさせて頂いた。その折、あるキリスト信仰者の女性と出会った。仮にAさんとして。

Aさんは、過度に気を使わない、さっぱりした印象のひとだった。私より年上なのに、少女のような感じがしたのは、日に焼けた素顔に、つやのある黒髪が映えていたからかもしれない。

私たちが出会ったとき、Aさんは長期ボランティアスタッフとして熊本にやってきたところだった。細長い手足に小柄な体で、当時ニーズが多かった引っ越し作業を行った。その働きぶりは、男性牧師にさえ、自分には及びもつかぬと舌を巻かせるほどだった。

ある日の、私と彼女の二人きりの朝食後のことだった。少し沈黙があったあと、Aさんは「福島4年いて」と話し出した。

彼女は東日本大震災以降、ボランティアとして福島で働いたという。彼女自身はもともと大阪で育った在日韓国人の方である。東日本大震災後、フルタイムのボランティアスタッフとして働いた。そこで、「弱さを見せてはいけない」ような環境の中で心身ともに「疲れ」、休みが必要となり、やめることとなった。

被災地なんてもうどこにも行きたくない——それが、福島で4年を経たAさんの気持ちだった。

その後、Aさんが海外を旅し、タイにいたときだった。日本で熊本地震が起こった。「震災のところなんてもうどこも行きたくなかった」はずなのに、地震のニュースにAさんは「そわそわ」した。Aさんは祈った。日本へ帰国した。本当は、旅の途上であったため、そのまま4日後にはフランスに発つことになっていた。友人に「熊本どう思う」と聞いてみると、こんな言葉が返ってきたという。

「熊本お？あんた4日後フランス行くんでしょ、(熊本には)あんたが行かなくても誰かが行くわよ」

ところが、友人のその言葉を聞いた次の日から、不思議なことが起こり、何日か続いた。誰かではなく自分が呼ばれていることを感じ、祈り、不思議に導かれて、Aさんは熊本に向かった。

熊本でAさんが見たものは、先の友人の言葉とは裏腹の現状だった。尋常でない量の支援物資に押しつぶされそうな教会の中に一人で頑張る女性牧師がいた。牧師を手伝うことがAさんの初仕事だった。ボランティアは不足していた。

Aさんが話をしてくれたとき、その黒髪が、風を受け颯爽となびいていたことを覚えている。快晴の空のもと、地平線が見渡せる広大な大地を、帰阪する私のためにAさんが車を出してくれたときのことだ。空港への途上、Aさんは嬉しそうに、こう語った。

『「主は私の羊飼いです」¹、その通りなんだよね。クリスチャンになりたてのときって、自分でやろうと思ってしまう。でも、神様に引きずり回されて(すべて委ねて)、の方がよっぽどいい。弱さと脆さをまもっていいんだって気づいた」

「旅をして自信ついた。神様がくれる愛に自信」

「前(福島でボランティアをしていた4年間)は、自分がだめだからなんだと思ひこんで…。人から何か言われるとへこんで。だから自分で頑張るって期待に応えなきゃって思っていた。今年に入って気づいたこと。自分には自信満々じゃないけど、神の愛にだけは、自信満々でいたい」

現在、震災時における宗教者ボランティアの存在が、メディアからも注目されている。行政をものぐず迅速な対応力、行政では難しい地域の一人ひとりに寄り添う丁寧なケアが際立つためだ。「誰か」ではなく、私が行かなければならない、私が呼ばれている——信仰によって確信して熊本に来たAさんの迅速な行動が、現地で孤立していた牧師に大きな助けとなったことは、ほんの一例に過ぎない²。しかしながら、専門家からは心配する声もあがっている。彼らが現地で疲れ果ててしまうケースがあるためだ。被災者をケアする宗教者にも、ケアが必要だと言われてきた。

Aさんが被災地に戻って来た回復のプロセスは、上記の懸念に対する、一つの答えの可能性なのではないだろうか。

人からのニーズに「応えなきゃ」と「自分がダメだから」と頑張り続け、人の言葉に落ち込み、疲弊し、支援の働きから離れ、もう戻りたくないと思っていたAさん——同じAさんが、助け手が誰もいない教会で、なくてはならない存在として働いていた。それも、義務感に押しつぶされて、疲弊したままの状態に戻って来たのではない。回復された状態で、戻って来たのだ。

「神の愛」に「もういいやあ」と、身をゆだねたAさんは、「神の愛にだけは、自信満々」になって、帰って来た。それは、もう人からは揺るがされないことを意味する。

現地では、ボランティアに行った先で、ボランティア依頼者から涙を流され、心の底に秘めた思いを聴くこともある。だがAさんは、もう揺るがされない。かつては疲弊させられた支援現場で、今度は、フランス行きのフライトを何度も先送りにするほど留まり、働いているAさんの姿があった。人には為せない回復——Aさんから、信仰によるボランティアの回復と言う可能性を見た。

注

1 旧約聖書の詩篇の冒頭にある有名な言葉。羊飼いに例えられる神を通して、人間を深く気にかけて愛する神の様子が伝わってくる。